

## 第6回循環制御研究会を主催して

会長 宮崎 正夫\*

第6回循環制御研究会は1985年(昭和60年)5月29日(水曜日)、例年の如く第32回日本麻酔学会総会の前日に、秋田市の秋田県児童会館で午前8時55分から16時まで、小玉株式会社の後援によって行なわれた。

今回の主題については色々と考えてみたが、基礎的なものとしては、やはり麻酔をかける時や、ICUでの治療のさいに、病態や薬剤投与の場合に、常に念頭においておかななくてはならない「心拍量と Afterload」を先ずひとつの主題とした。少し固苦しく、またあまり明確なものが確立して打ち出せないのではないかと懸念したが、これはこの主題のシンポジウムの司会をした京都府立医科大学麻酔学教室の田中義文助教授の進言によることもあって、採用した。

もうひとつの主題は、最近ますます症例の増加している「心大血管合併症の患者の麻酔」である。心臓疾患や大血管疾患を合併している患者の麻酔は、高齢化にともなって増加しているし、開心術のように心そのものを構造修復する麻酔や手術も難しいが、合併症として持っている患者の麻酔や手術は、心大血管の病変自体がよくなるわけではないから、考えようによってはもっとむづかしいものである。

ただこの主題を決定したあと、皮肉にも、会長である私自身が、即接する第32回日本麻酔学会総会において、「冠疾患の麻酔」のうち、「冠疾患を有する患者の麻酔」というシンポジウムの司会を渡部会長から仰せつかったので、同じ主題でダブってしまったことになった。

もっとも私の司会したシンポジウムでは、3人の限定された方々しか話していただけなかったもので、当然それ以外の全国からの発表を、この主題でのべていただけたと考え直した次第である。

\*京都府立医科大学麻酔学教室教授

この2つの主題に対して、当初は一般演題として、自由に出題していただいた。もちろん、可能ならばシンポジウム形式にすることは、前もっておことわりしておいた。

演題をしめ切ってみると、やや多いかも知れないが、まずシンポジウムに組める範囲なので、思い切ってシンポジウムとした。

「心大血管合併症の患者の麻酔」では、困難な合併症を伴った症例をまとめて下さった演題と、それらの管理の方法を議論する演題と、大体2つの流れが出来たようであるが、このまとまりの少しむづかしいシンポジウムを、司会の千葉大学麻酔学教室の飯島一彦助教授はよくまとめていただいて、本当に御苦労であったと深謝する次第である。昨年第5回本会の実行者としての同先生の循環制御研究会に対する御尽力は高く評価されるべきであろう。

9名の第一線麻酔科医の貴重な経験と研究を発表していただいて、日常実際に遭遇する問題を十分検討して、直ちに臨床に役立つ教訓の得られる発表が多かった。

「心拍量と Afterload」の問題では、若い研究者がその研究の最先端を持ちよって、十分に討論していただく結果となった。

この機会に、このむづかしい問題について、各人の研究の主張をはっきりしていただくために、敢えてこの困難なテーマに、若い司会者をあてて熱気のある討論を行なっていただくことを強く期待した。若し討論や司会に未熟な点があったとしたら、司会者の若さの故と御寛容いただきたい。

シンポジストの先生方は若い麻酔科医の方が多く、多少不慣れかとも案じたが、第一線で臨床と研究をやっている人達、本会が研究会であって自由な討論を望むべき会合であること、若い方々には麻酔学会などのように大きく成熟した学会で

は、なかなかシンポジウムにも出ていただくには、年功と経験を要求されて、その機会の与えられない事などを考えて、シンポジウムを編成したことは、会長として悔いのない所と思っている。これを機会に益々新しい人達の自由な発表の場と、本会が育ってゆくことを切に希望する。

主題の「心拍出力と Afterload」についての特別講演を国立循環器病センター研究所の二宮石雄先生におねがひした所、「麻酔および無麻酔動物における神経性循環調節について」という御講演を承った。

詳細は本文を御参照いただければよく、会長が解説を加えることは失礼であるが、先生の長年積み上げられた御研究の、ことに最近無麻酔で自由行動下の動物から、麻酔のさいに大変関係の深い調節神経信号を記録解析された成績を見せていただけたことは、麻酔科医として大変印象が深かった。この点で、基礎的の勉強が出来たことは、本会のひとつの目的を達成出来たと喜んでいる。本号の先生の論文を、私ももう一度じっくりと読ませていただくつもりである。

もうひとつの Mr. M. V. Braimbridge の特別講演の「Calcium and cardiac surgery」をしていただいたいきさつを少し述べておく。

同氏は心臓外科医としてつとに名声が高く、我が国でも浅野猷一東大教授監訳の「心臓術後管理マニュアル」は有名である。しかし麻酔科医には案外なじみがなかったのは、同氏の業績が一口に云うならば冠灌流液の研究で、わが国の研究会学会でいえば、心筋保護・心筋代謝研究会や胸部外科学会でより密接な関係があったからであろう。

今回の来演も、実は国立循環器病センター集中治療部の責任者である田中一彦氏からの依頼であった。田中一彦氏は現在ロンドンの同氏の所属する St. Thomas Hospital に留学中であるが、同病院にはつい先頃まで同センター心臓外科の山本文雄氏も留学しておられ、今迄東大筑波大九大などから、多くの留学生が Braimbridge 先生のもとで研究された次第である。今回はその御恩返しとして、主として田中・山本両氏および東大浅野筑波大堀九大徳永3教授の御努力で来日の運びとなり、循環器病センターはじめ、東京筑波福岡で講演を持たれて、最後に我々の研究会で特別講演をしていただいた次第である。

私としては同氏の  $Ca^{++}$  と心筋に関する研究を主題として話していただき度く、且会員には大部分酔麻科医が占めている研究会の現状を十分書いてお送りしたのであるが、他の講演がすべて心臓外科医相手のものであるから、多分にその傾向の強いものとなった。

私は循環器病センターの、来日初回の講演をきいたが、これは大変素晴らしいものであり、また氏が英国で用意された唯一の全文抄録を配布されて講演されたものである。三大学での講演内容は存知しておらないが、秋田に来られるまでに、麻酔科医の多いことを強調した結果、前夜遅くまで、そのように話の内容をアレンジされたようであり、講演全文は用意されずに、アドリブで話されたようである。残念乍ら全文をいただけずに、手許に残されたのはテープレコーダーのみである。

話の内容は半分は来日に当り用意されたテキストと、半分は Braimbridge, M. V., et al: Calcium and cardiac surgery. European Heart Journal 4 (Suppl. H), 143-150, 1983 に発表された内容で、話の内容からすれば、この原著を本誌に再録した方がよいかも知れないが、すでに既著述論文であり、著作権の問題もあって、来日にあたり用意されたテキストを記録としてとどめざるを得なかった点を、深くお詫びすると共に、司会の山本道雄岐阜大学教授には色々な点多大の御苦労と、御迷惑をおかけしてしまつて申し訳ないと思っている次第である。

Braimbridge 先生は、日本における各地での講演の機会と、Japanese hospitality に大変感激され、夫人と共に10数日の滞日をお喜びされた由で、会長にも帰られてから謝辞をお送りいただき、会員諸兄にも宜しくとのことであり、お伝えいたすことは大変嬉しいことである。

時を得て先生のテキストと上述の原著などをさらに反芻検討して、テープレコーディングとつき合せてみたいものである。

大学のある京都から遠く離れた秋田での開催で、教室員も十分の活動が出来ず、会員各位に御不便を感じさせたのではないかと反省している。またこれを十分に補っていただいた小玉株式会社の社員の皆様に重ねて御後援の御礼を申し上げたい。